

Title

セルフ・インタビュー——チェスプレイヤーとフィールドワーカーの対話

Name

渡辺 暁

筆者は現在、東工大の教養科目としてのスペイン語の教員・科目運営をしている教員であり、メキシコを中心とするラテンアメリカの現代社会について、現地でのフィールドワークを主たる手段としながら研究している研究者であるが、かつては（当然学業や他の仕事の傍らではあるが）チェスというゲームにもかなりのめり込み、国際チェス連盟（FIDE）マスターのタイトルを獲得した他、全日本選手権に3度優勝し（1999-2001 チャンピオン）、国別対抗戦「オリンピアード」にも5回（2020年のオンライン・オリンピアードを入れれば6回）出場している。

数年前に東工大という職場に移籍したこと、そして50歳を過ぎた（チェスでは「シニア」の大会に出られる年齢である）こともあり、これまでの自分の思考過程をどうまとめていくべきかを考えるにあたって、自分にとって研究や教育と並行して大事にしてきたチェスのキャリアについても、研究という媒体の中で考えてみたいと思うようになった¹。しかし、研究者としての私は、チェスについてどんなことを考え、どんな研究をしていきたいのだろうか。それを考えるにあたり、やはり自分のチェスプレイヤーとしてのキャリアを振り返る、というのは必要な作業であるように思われる。

本稿は、かなり前に現役を引退したチェスプレイヤーへの、メキシコ等で調査をしてきたフィールドワーカー（実は同一人物）によるインタビューという体裁をとった、私自身のこれまでのチェスのキャリアを振り返った文章である。なお、このフォーマットは、私が敬愛する元世界チャンピオンのミハイル・タル（Mikhail Tal：タリと表記される場合も多い）が自ら書いた（とされる）、*The Life and Games of Mikhail Tal*（1976年初版刊行：私が読んだのは、1997年に別の出版社から再版された版）を参考にさせて頂いたものである。（同書は自伝という形を避けるため、ジャーナリストがタルにインタビューするという形式を取っているが、実はタル自身もチェス雑誌に携わったりこれ以外にも本を書いたりするなど、文筆家としても活動していた。）²。

なお、将棋と囲碁という非常にポピュラーなボードゲーム（特に前者はチェスに似ている）が存在する日本という場所において、チェスというゲームを競技として続けることには、様々な難しさがある。（そしてまた、私自身はこれまであまり関わったことはないが、競技団体を運営していくことはなおさら大変なことであろう。）私自身も、もちろんその影響を受けているという自覚はあるが、今回はなるべくそのあたりには立ち入らず、なるべく盤上のキャリアに限って、自分のこれまでのチェスとの関わり、そしてチェスプレイヤーとしての自分と研究者としての自分の関わりを、振り返ってみたい。

* * *

フィールドワーカー：ご自身のチェスのキャリアを簡単に振り返ってみてください。

チェスプレイヤー：ルール自体は小学生の頃に父親に教わりました。そして高校生のとき、将棋部に入っていたのですが、その頃からチェスもやるようになりました。おそらく直接のきっかけは、当時日本で唯一チェス部があった、麻布高校のチェス部の皆さんが作っていた部誌を、私の学校の将棋部に送ってくれたことだったのではないかと思います。その後、当時の日本チェス協会（現在は日本チェス連盟に運営が引き継がれている）の存在を知り、チェスの大会に出るようになりました。あとは、父親が米国から買ってきてくれた本で勉強した気がします。将棋をやっていたので、先を読む力はそれなりにあったのだと思いますが、チェスというのは将棋とは全く別のゲームだ、ということはあまりわかっていなかったように思います。

その後、大学に入学する年の3月に日本ジュニア選手権で優勝し、8月にチリで行われた世界ジュニア選手権に出場しました。その大会でトップクラスだった人たちは、今でも現役で、あるいはコーチとして、世界的に活躍しています。私自身は58人中55位だったと思いますが、とにかく惨憺たる成績でしたが、その大会がきっかけとなって、私自身も大会前よりはかなり真剣にチェスをやるようになりました。特に影響を受けたのは優勝者と同率ながらタイブレークで2位となったソ連（ラトビア）代表のシロフ（Alexei Shirov）選手で、彼はその後世界選手権の挑戦者にまでなり（ただしこのときはスポンサーが見つからず、肝心のタイトルマッチは開催されませんでした）、今でも攻撃的なスタイルと正確な終盤の技術で世界中にファンを持っています。また、このときやはりソ連代表だったアルメニアのアコピアン選手（Vladimir Akopian）と、2014年のオリンピックで対局できたのは感無量でした。（付録のGame11になります。惜しくも敗れましたが、こうしておけば引き分けのチャンスがあったかも、というのを、局後に彼から指摘されました。なかなかいい試合でした。）

大学2年次の時にはルーマニアで行われた世界ジュニア選手権にもう一度参加させてもらい、このときは負け越しでしたが、かなり成績も上向いたように記憶しています（このときの優勝はアコピアン選手でした）。また、大学4年次にはブラジルのパラナグアーというところで開催された世界大学選手権というチーム戦に出場し、1番ボード（大将）の金メダルをもらいました。ただ、日本選手権では毎年そこそこいいところに行っていましたが、なかなかチャンピオンにはなれず、という感じでした。この頃特にお世話になった方として、日本チャンピオン経験者の西村裕之さん、ジャック・ピノーさん、鈴木知道さん、フィリピンから当時の日本チェス協会に招聘されてきてコーチをしていたドミンゴ・ラモスさん、女子のチャンピオンだった故竹本尚子さんのお名前をあげておきたいと思います。

フィールドワーカー：Wikipediaに「メキシコにチェス留学」していた、と書かれていますが、これは1994年のことですね（<https://ja.wikipedia.org/wiki/渡辺暁>, 2023年7月31日最終閲覧）。

チェスプレイヤー：まず訂正ですが、「チェス留学」ではありません³。「日墨交換計画」という国費留学の制度で派遣されて、1994年の3月から翌95年の2月まで、メキシコに滞在しました。メキシコ国立自治大学（UNAM）の語学学校と政治社会科学部に通いながら、チェスでも大会に参加したり、キューバのコーチのレッスンを受けたりしました。キューバはカパブランカという世界チャンピオンの出身地で、ソ連との関係が深かったこともあって、ラテンアメリカではアルゼンチンと並んでチェスが最も強い国ですが、当時は大変な経済危機で、チェスのコーチやプレイヤーの人たちが、当時景気が良かった（実は1994年の年末に経済危機に陥るのですが）メキシコに出稼ぎに来ていて、大会で試合をしたり、プライベートレッスンを受けたりしたのです。この年にはモスクワで行われ

たチェスオリンピアドにも初めて参加するなど、もしかするとチェスを一番やった年かもしれません。(スペイン語も留学のおかげでやっと多少はものになったかな、という気がします。そのときはまさか自分がスペイン語を教えることになるとは思っていませんでしたが、今から振り返ると本当に色々な意味で転機になった年でした。)

モスクワについては、初戦でいきなり(そうとは知らずに)グランドマスターと対戦し、なんとか守り切って引き分けに持ち込んだのをはじめ、いろいろと思い出深いゲームもありますし、最終的に五分の成績(12試合で6ポイント)をおさめたのもよかったのですが、もしかするとそれ以上に、コーチだったルイセンコさんとの出会いが大きかったように思います。大会が始まってからの、その日の試合を準備しながらのトレーニングでしたが、ソビエト・ロシアのチェスの素晴らしさに触れたというか、今までとは全く違う発想のチェスを教わった、という気がします。

フィールドワーカー：1995年に帰国したわけですが、その後大学院にも進学したわけですね。

チェスプレイヤー：はい、1996年に学部(東京大学教養学部)を卒業し、そのまま大学院(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻)に進学しました。今の私が指導教員なら、そんなことを言う学生が来たら絶対に受け入れませんが、研究と同時にチェスももう少しやりたかった、というのが本音でした。(もちろん指導教員の先生にはそんなことは一言もいいませんでした。いずれにせよ、大学院で研究することの意味をどの程度理解していたのか、あまりわかっていなかったのではないかと、という気がします。当時の自分を論じてやりたい気分です。)

1996年のアルメニア・イェレバンでのオリンピアドでは勝ち越し(チェスもさることながら、アルメニアの大学で日本語を学んでいる皆さんとも交流したりして、素晴らしい大会でした!)、1997年は修士論文を書くということでほとんど駒に触りませんでしたが、チェス愛好家の人たちに頼まれて毎週土曜日に3時間のレッスンをしていた、それはきちんとノートを作ったりしながらやっていました。

フィールドワーカー：渡辺さんは1999年から2001年までのチャンピオン、ということになっていますが、実際に全日本選手権で優勝したのは、1998年から2000年だったと思います。

チェスプレイヤー：詳しい事情は私もわからないのですが、全日本選手権は毎年ゴールデンウィークに行われ、その年に優勝した人は次の年のチャンピオン、ということになっていました。

確かに1998年から2000年に三連覇しましたが、実はその前の1997年の全日本選手権でも同率で首位だったのですが、このときは失格となりました。そのときのことも、いずれは話さなければと思っているのですが、今はまだその心の準備ができていません。また、1998年3月に行われた百傑戦という全日本選手権の予選でも、羽生善治さんに負けたりして、かなり落ち込みました。(それについてもいずれ機会があれば、と思いますが、今回はお話ししようという気にはなれませんでした。)

まあとにかく、1998年4月に博士課程に進学し、その年の5月の全日本選手権では10勝2引き分け(13ラウンドで行われますが、最終戦はすでに優勝が決まっていたため不戦ドロウ)で優勝しました。この要因として、1994年以來のルイセンコさんの教えが大きいと思うのですが、ドヴァリエツキ(Mark Dvoretsky)とユスポフ(Artur Yusupov)という二人のトップコーチ(ユスポフは世界のトップクラスのプレイヤーでもあった)が書いた『ポジショナルプレイ』という本を読んで臨んだのが良かったのかな、と思います(Dvoretsky and Yusupov 1996)。この本の偉大なところは、彼らのところに集まった、世界のトップを目指すような若いプレイヤーたちの

トレーニングの様子を実況中継のような形で紹介することで、グランドマスターたちの思考をかなり具体的に、そして細かく説明してくれたところにあります。タイトルのポジショナルプレイというのは、局面を少しずつ良くしていく指し方、とでも言えばいいのでしょうか。チェスというのは戦いのゲームですが、常に盤上で戦いが起こっているわけではありません。そうではないときに、直線的な戦いの変化ではなく、中長期的に先を見据えたプランを立て、それに応じた手を指すこと、というのがとても大事なのです。おそらくその考え方、そしてそれに基づいた手の組み立ては、当時の日本のプレイヤーの皆さんにはかなり斬新だったのではないかと思います。

1998年のカルミキアというところで行われたオリンピックには参加しませんでした。この年の夏の世界学生選手権（オランダ・ロッテルダム）と冬のゾーン大会（東南アジア選手権：ミャンマーのヤンゴン開催）に出場して、後者では6-7位タイに入るなど、好成績を収めました。2000年のイスタンブールでのオリンピックでは、グランドマスターに勝つなどして、インターナショナルマスターのノームを達成します。

このあたりが私のチェスのピークだったと思います。実際に一瞬だけですが、「がんばればグランドマスターになれるかも?」と思ったのもこの頃でしたが、そんなことをしては恐らく、大学院をやめざるを得なくなっていたと思いますし、今頃どうなっていたか。2000年のオリンピックを最後に、学業に集中しなければと、日本のチェスからは離れてしまいましたが（2008年頃にきっかけがあって復帰）、その後もメキシコでは、時間を見つけて大会に出たりしていました。特に、2001年の留学中は、選挙政治の調査をしながら、チェスの大会やレクチャーなどのためにメキシコの色々なところに呼ばれたりして、とても充実していました。（後述のユカタンでの経験に加え、ロペス＝オブラドール現大統領の出身地、タバスコ州で24時間チェスマラソンに出たり、地方選挙とチェス大会にあわせてドウランゴという町に行き、それに加えて10日間チェスのレクチャーをさせてもらったりと、得がたい経験をさせてもらいました。）

フィールドワーカー：これは私（フィールドワーカー渡辺）からあなた（チェスプレイヤー渡辺）に聞くべきことかわからないというか、その二つが混じってきているわけですが、メキシコでのチェスの活動と研究活動の重なりについて教えて下さい。

チェスプレイヤー：はい、だんだん「フィールドワーカー」と「チェスプレイヤー」の境目が怪しくなってきましたね。実はユカタンという場所をフィールドにしているのも、チェスと大いに関係があります。ユカタン半島というのはメキシコシティからかなり離れた、気候的にも文化的にもかなり違う土地です。このユカタンのメリダというところに、アレハンドロ・プレーベさんというオーガナイザーの方がいて、以前から毎年、カルロス・トーレ記念トーナメントというのをクリスマス前に開催していました。（カルロス・トーレ [Carlos Torre Repetto] は、ユカタン出身でニューオーリンズで育ち、ヨーロッパに渡って活躍した名チェスプレイヤーです。）

2000年に重要な選挙があって、私は選挙監視のプロジェクトでユカタンに行く機会があり、そのときにプレーベさんにも連絡を取って、大会に参加させてもらうことにしました。（実を言うと、選挙監視の行き先としていくつかの可能性を提示され、チェスで縁があったユカタンを選びました。）選挙監視のプロジェクトとしては2000年の5月と7月に調査に行ったのですが、6月にちょうどチェスの大会があって、そのときにもメリダに行き、招待選手として滞在させてもらいつつ、7月の調査に向けて準備をした、という感じで、非常にありがたかったことを覚えています。

ユカタンは他の選挙監視団体が入る予定だった地域に比べて、比較的選挙不正の状況がわかりにくい場所でしたが（渡辺 2002）、そういう場所を選んだことで、政治学的にとっても興味深い状況（逆に言えば政治的に問題がある

と言うことですが)に出会えたので、結果的に非常に重要なチョイスとなったと思います。それに加えて、選挙監視員として現地入りする、ということは、それ自体かなり特殊なことなので、そういう形とは別に、チェスプレイヤーとして現地に入って、よりニュートラルな立場で現地の皆さんと話せたのは良かったかな、と思っています。

もちろん、その後もユカタンで知り合ったチェスの仲間とは、交流が続いています。メキシコシティーから来ていた審判員の方には、「次からシティーに来るときにはうちのお母さんの家に泊まりなよ」と言われ、コロナ前まではいつもそちらのご家族のところに居候をさせてもらっていました。コロナが始まってからなかなか会えないのですが、早くメキシコに戻れたら、と思っています。

フィールドワーカー：その後のチェスのキャリアについても教えてください。

チェスプレイヤー：2003年にアメリカ合衆国のイェール大学に留学する機会を頂き(Fox International Fellowship)、ローカル大会に出たり、地元の高校生にレクチャーをしたりはしていました。そうそう、日本人のお子さんとも何人か知り合いました。言葉の壁があっても、チェスクラブでは受け入れてもらえた、という話が印象に残っています。それこそ、ニューヨークあたりに住んで、日本人のご家庭のチェスの家庭教師でもするという道もあったのかな、と、思わなくはないです。また、大会で出会ったアフリカ系のコーチの方に、(少し離れたところにある)うちの学校に教えに来てくれないか、といわれて、忙しいからと断ってしまったのを、今も後悔しています。このアメリカ留学の間、何度かメキシコでの大会にも出ましたが、もちろんすでに軸足は学問の方に移っていたので、実力の衰えも自覚していました。

2006年に帰国してからは、チェスをする機会はさらに減っていたのですが、2008年、ブラジルでの大会に招待され(その年が日本からの移民の100周年だったご縁で、日本からも誰か、ということで私に声がかかったのです)、なかなか就職が決まらずにつらい時期でしたが(博士号をとらなかった私が悪いのですが)、参加することにしました。そして、そのためのトレーニングと言うことで、日本の大会にも久々に出ました。今はインターナショナルマスターになっている、南條遼介さんと小島慎也さんのお二人がかなり強くなってきていると聞いていたというのも、復帰の要因の一つでした。

その後は全日本選手権にも復帰して、一番いいときで、最後勝てば同率優勝、というところまでいきました。(また、すっかり忘れていましたが、2012年にはジャパン・リーグという大会で優勝しました。)その結果、2012年と14年のチェスのオリンピックにも出ることができて、昔の知り合いと再会することができたのはとてもうれしかったです。特に2012年のイスタンブールで、1990年のチリでの世界ジュニア大会で仲良くなった、トルコとジャマイカの選手と再会したのは、本当に感慨深いものがありました。

2012年にありがたいことに山梨大に就職しましたが、山梨大でも、それまでに非常勤講師として教えていた大学でも、あるいは教員公募に応募するときも、特に自分からチェスのことを話すことはありませんでした。チェスのチャンピオン、という付加情報なしに、目の前にいるスペイン語の先生はいい先生だ、と思ってもらいたかったからです。そうはいっても名前を検索するとチェスのことが最初に出てくるので、すぐにばれるんですけどね。(あと、非常勤先のある大学でなぜか私のことを「羽生先生」と呼ぶ学生がいたのを、おぼろげながら覚えています。

ただ、東工大への転職を考えていたときは、東工大ならきっと私のチェスのキャリアのことを評価してくれる人もいだろう、と考えたので、教員公募の時のエントリーシートにもそのことを書きましたし、また実際にオープンにしてみました。その結果、着任直後のコロナ禍の時期に、東工大のDLabの"STAY HOME, STAY GEEK"シリーズにお声がかかったり⁴、今の3年生の皆さんがチェスサークルを作ったときに、顧問になりませんかと声をかけ

てくれたりと、いろいろな新しい動きがあって、ありがたいことだなと思っています。

フィールドワーカー：チェスの本を3冊書いていますが、それについてもひとことどうぞ。

チェスプレイヤー：はい、最初に書いたのが2010年に出た『ここからはじめるチェス』で、それ以来、3冊も本を書かせてもらいました。恐らく一番売れたのはこの最初の本で、10刷くらいまでいきました。（ただ、残念なことに、もう再版はしないという連絡を頂きましたが、少なくとも本稿執筆時点において、kindle版は入手可能です。）

2012年に出た2番目の『渡辺暁のチェス講義』も、最初に刷った分が売り切れたということで、2021年に増刷して頂きました。（そのときにかなり直して新しい情報も盛り込んだので、初版をお持ちの方にもぜひ、2021年バージョンも手に取って頂きたいです。）どちらの場合も、本を書く、というのは当たり前ですが大変な作業でした。『チェス講義』の方は、その多くが、大分チェスクラブの小池秀幸さんが運営して下さっていた、Open Your EyesというタイトルのWebサイトを元にしていたのですが、そうはいつでもやはり本にするというのは並大抵の苦勞ではありませんでした。

そして、入門書にはそれとは別の苦勞がありました。『ここから』の方は矢印を色々な意味で（青は直接のコマの動き、赤はコマの利き、などなど）使ったりしたので、その色指定の間違いやら何やらで、大変な目に遭いました。結局最後まで図面に間違いがあった、ということで、なんだか申し訳なかったです。（でも、内容はなかなかいいと思います。）また、3冊目は1冊目と同じ入門書と言うことで差異化に苦勞しましたが、解説をよりやさしくしたのに加え、当時リバイバルが始まっていたイタリアン定跡という序盤の作戦を取り入れたり、前述のカルロス・トーレの棋譜を使ったりして、新しいものを作れたのは良かったと思います。（その後増刷されていないのが残念です。Amazonではプレミアがついているので、需要はあるような気がするのですが、せめて電子化して欲しいです。）

これだけオンラインチェスが全盛で、YouTubeの講座などもある時代に、本を読んでチェスを覚えるというのは時代錯誤なのかもしれませんが、それこそ誰か、オンラインで駒を動かしながら読めるようなフォーマット、というのに移行してくれたらいいのにな、などと夢想しています。

フィールドワーカー：最近日本のチェス人口も増えてきているみたいですが、それについてもひとことお願いします。

チェスプレイヤー：日本チェス連盟のレーティングリストというのがあります。それを見ると日本には1350名の「レーティング」とよばれる、実力を現す点数を持つプレイヤーがいます（活動していない人も含めてですが）。また、FIDE（＝国際チェス連盟）の国別リストでは、トップの100人しか表示されないのですが、100人の名前が出てくると言うことは、それ以上の現役のプレイヤーがいることですから、素晴らしいことだと思います。これだけ多くの優秀な人がいたら、私などがチャンピオンになることはなかっただろうな、と思って、少し申し訳なくなります。

競技人口の増加にはいろいろな側面があると思いますが、やはり大きいのはネットチェスの普及ではないでしょうか。チェスというゲームは、将棋や囲碁と違ってなかなか触れる機会がありませんが、ネットが入り口となって、チェスに触れるというケースも出てきているし、強くなりたい人は地方にいてもオンラインでチェスを習えたり、そしてもちろん対局したりできるので、裾野は確実に広がっていると思います。もちろん現在の国内のチェスを取

り仕切る組織となっている、日本チェス連盟の皆さんのご尽力も大きいと思います。

フィールドワーカー：今もチェスを続けていたらどうなったんだろう？という気持ちはありますか？

チェスプレイヤー：もちろんないわけではありませんが、20代の頃のようにはいかないだろうし、その頃の自分と今の自分を無意識に比較してしまうのがこわい、というのが正直なところですよ。そしてもちろん、今は家族と仕事という、チェスより大事なものがあるので、率直に言って、1週間も大会にかかりっきりになるなんて信じられない、という気持ちです。子供たちがチェスをやるとなったら、喜んで彼らを大会に連れて行きますし（あまり口を出すと怒られそうですが）、もしかしたら自分も同じ大会に出場する、ということはあるでしょうが、それまでは自分が大会に出るのは正直考えられないですね。やるとしても、フル出場はせず、このラウンドは抜けます、とあって、その間は子供の相手をするんじゃないですかね。（注：チェスでは多くの大会が、いわゆるトーナメント方式ではなく、少し相撲に似ていますが、スイス式という、全てのプレイヤーが同じ数のゲームをこなして、合計の得点で勝負を決める、という方式で行われます。また、他の用事があってこの時間帯は試合に出られない、という人は、事前に申告すればそのラウンドを休むことができます。本当はあまり良くないのですが。）

フィールドワーカー：そうはいつでも復帰して下さい、といわれたりもするのでは？

チェスプレイヤー：はい、ありがたいことにそう言って下さる方もいらっしゃいます。「大会に出て下さい」というのは（選手にも、オーガナイザーの方にも）言われるのですが、正直、体力も使いますし、一度大会に出てしまうと、「あの局面であすればよかったかな？」とか、考えてしまって仕事にも日常生活にも差し支えるので、ちょっと難しいですかね。（ちなみにこの年になって、チェスをやっていて良かった、と思うことは、老化を先取りできる、ということです。昔のようにはいかない、ということが良く分かります。もちろん、それを謙虚に受け止めることができるかどうかは別問題ですが。）

あとは、私も一応その資格はあると思うのですが、招待選手という制度も作ってくれればいいのにな、と思います。予算に余裕があればアピランスフィーというのもあると思うのですが、それは難しくてもせめて参加費は無料にしろとか、地方の大会であれば交通費や宿泊費の一部を出してもらえ、というふうにすれば、その人たちとの対戦の可能性があるので出よう、という人も増えるでしょうし、招待される本人にとってもありがたいかなと思います。（別に私ではなくても、というか私ごときは呼びではないかもしれませんが、他の日本のトッププレイヤーには、ぜひそういうふうにしてあげたいのに、と思います。現在はグランドマスターとインターナショナルマスターは招待、という大会も多いみたいですが、そもそも日本にほとんどいないので。）

日本の大会の収支報告を見ると、最近は審判の方にはきちんと謝礼が出ているようなので、次はトップのプレイヤーたちにも、賞金ではなく、何らかの安定した経済的なリターンを、というふうに思っています。強くなるにはお金にしても時間にしても、かなりの元手がかかってますし、そしてまた、強いプレイヤーと指すことは確実に勉強になりますから、少しでも強い人たちにインセンティブを与えるようなシステムを作ってもらえたらと思います。

フィールドワーカー：最後に、今後チェスとどんなふうに取り組んでいこうと考えていらっしゃるか、教えて下さい。

チェスプレイヤー：試合に出るという、一番手っ取り早い貢献が色々な意味で難しいとはいえ、私としても「こういうやり方なら貢献できる」という方法は色々考えています。東工大でもチェスサークルができて、さっそく顧問を引き受けましたし、例えば、私が住んでいる山梨の甲府近辺でチェスのイベントをする、という企画を立てて下さる方がいるなら、半日くらいはお付き合いできると思います。

今回暑い中、こうやってこの原稿を書いているのも、そういう日本のチェスに何かできないかな、という気持ちの表れでもありますし、再び本を書くのは難しいかもしれませんが、たとえばYouTubeのチャンネルでも作るというのもいいかな、と思っています（見て下さる方がいるか分かりませんが）。そうそう、そういえば一昨年の話ですが、Netflixの『クイーンズガンビット』というドラマの原作の翻訳の監修などもやりました。（そのとき調べた内容については、渡辺[2021]にまとめてあります。）

そしてまた、チェスを研究としてとらえることで、もしかするとチェスの新しい魅力を見つけることもできるかな、と思っています。この原稿を読んだ方が、いろいろとまたコメントを下さったりすると、ありがたいなと思います。

フィールドワーカー：それでは最後にまとめのひとことを。

チェスプレイヤー：今回この原稿を書いてみて、自分がチェスを続ける中で、色々な方にお世話になってきたんだよな、というのを、改めて感じました。チェスでは試合が終わると、ちゃんと、この手がよかったよ／悪かったよ、とか、こうすればもっと良かったんじゃないのかな、とか、プレイヤー同士で分析をして、自分が何を考えていたのかを教え合ったり、相手にアドバイスをしたりします。そういうところ、それこそ「利他」という、未来の人類研究センターの大事なキーワードの一つにもつながるような気がしますし、チェスのことを今後もいろいろと皆さんに考えて頂くきっかけとして、この文章が少しでもお役に立てばいいなと思います。

参考文献

Dvoretsky, Mark and Artur Yusupov. (1997). *Positional Play*, Batsford.

Tal, Mikhail. (1997). *The Life and Games of Mikhail Tal*, Everyman Chess.

渡辺 暁 (2010) 『ここからはじめるチェス』 ナツメ社

—— (2012) 『渡辺暁のチェス講義』 評言社

—— (2016) 『図解チェス入門』 朝日新聞社出版

—— (2020) 「スペイン語を通して視野を広げてもらいたい」 東工大リベラルアーツ研究教育院教員インタビュー (https://educ.titech.ac.jp/ila/news/2020_04/058948.html, 2023年7月31日最終閲覧)

—— (2021) 「三十七年の孤独：『クイーンズ・ギャンビット』とチェス描写」 『波』 7月号 (https://ebook.shinchosha.co.jp/nami/202107_16/, 2023年7月31日最終閲覧)。

渡辺暁・山崎太郎 (2021) 「対談：チェスとスペイン語と移民研究」 『外国語だより』 第5号、3-12 ページ (https://www.fl.ila.titech.ac.jp/pdf/voices_from_the_foreign_languages%20section_vol5.pdf, 2023年7月31日最終閲覧)。

付録：自戦解説 My 16 Memorable Games

このような記事を書かせて頂く機会も今後なかなかないと思うので、比較的最近（といっても一番古いのはなんと15年以上前ですが！）自分が指したゲームを「付録」としてつけることにしました。チェスをなさる方には、よかったら並べてみて頂けたらと思いますし、そうでない方も、それぞれのゲームにつけた解説に目を通して頂けたらと思います。自分の全盛期は約20-25年前の20代後半の頃だと自覚していますが、あえてそれ以降のゲームだけを選びました。ほとんどが国際試合で、一部は本当の世界のトップクラスにいた、あるいはその後になった人たち、そしてその他のゲームも、自分よりはかなり強いはずの、グランドマスターやインターナショナルマスターたちとのゲームです。勝敗そのものよりも、面白い駒の動きがあったゲームや、どこか自分と似たような立場でアマチュアとして国際大会に参加している人との、記憶に残ったゲームを選びました。それぞれにゲームについて、簡単なコメントを、大会ごとにつけていくことにします。

なお、この付録のセクションのタイトルは、伝説の世界チャンピオンとしてチェス界以外でもよく知られる、ボビー・フィッシャーの名著、*My 60 Memorable Games* からもらいました。本当は白番8局、黒番8局にしたかったのですが、黒番の方が多くなっています。また、棋譜に直接的な解説をつけないかわりに全般的（なおかつ説明的）なコメントをつけるというスタイルは、ブロンシュタインの名著、*200 Open Games* にインスピレーションを得ました。世界チャンピオンにならなかった最強のプレイヤーの一人として名高いブロンシュタインが、自分が指したオープンゲーム（チェスの最も基本的な序盤の作戦とされる、初手1.e4 e5で始まる試合）を題材に書いた本で、それぞれのページに図面が一つと棋譜、そして残りのスペースには、普通のチェスの本とは違って、手の説明自体はごく簡潔にとどめる代わりに、そのゲームが指された状況や、相手とのやりとりなどを書いた、とても興味深い本です。（例えば、その中のゲームの一つにつけられた“The Blue Sea of Azov”というタイトルが強く記憶に残っていたのですが（p.102）、実はなぜそのタイトルがついているのか、意味がきちんと理解できておらず、今回この項を書くにあたって読み返し、ああそういう意味だったのか（＝その章の主役のタルタコワはアゾフ海にほど近いロストフ・ナ・ドヌの出身で、ブロンシュタイン自身もアゾフ海を見て育った：そして、アゾフ海やロストフという地名は、今回のウクライナでの戦争に深く関係がある）、というのをやっと理解した次第です。

私のメモ書き程度のコメントを、ブロンシュタインの本とくらべるのはおこがましいのひとことですが、それぞれのゲームの簡単な背景を書いておくことで、少しでもチェスをする、こと、についての理解が深まればと思った次第です。なお、ほとんどのゲーム（そして私が指した国際大会でのゲーム）はネットで見ることができますので、パソコンあるいはスマホ上で見たい方は、ぜひそのようにされて下さい。「ここでこうすればさらによかった」というのも、局面を入力するか棋譜をダウンロードするなどして、StockfishなどのAIで解析すれば、AIが良い手を教えてくれると思います。

なお、手に「!」が付いているのは好手（こうしゅ＝良い手）、「?」が付いているのは悪手（あくしゅ＝悪い手）となります。また、「!?’は確実に好手かどうかはわからないが面白い手、「?’は疑問手（ぎもんしゅ＝悪手とまでは言えないが、良くない手）の意味となります。

Sao Paulo 2008

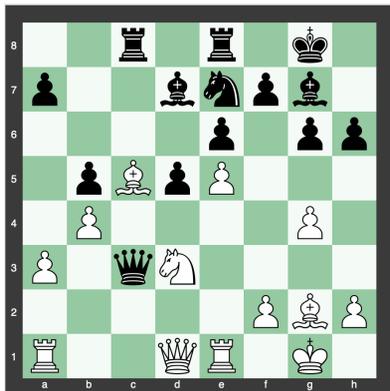
ブラジルのサンパウロで、オランダの元世界チャンピオン、マックス・エウヴェ（Max Euwe）を記念した財団がスポンサーについて、ブラジルのチェスの重鎮（プレイヤー・審判・オーガナイザーのどれを取っても一流）のヘルマン・クラウディウス・ファン・リームスダイク（Herman Claudius van Riemsdijk）さんがオーガナイズしたトーナメントに、この年が日本からの移民100周年だったことを記念して、招待されました。9試合で2勝6敗1引き分けという惨憺たる成績でしたが、ここでは負けなかった3局をご紹介します。Game 1と2は勝ったゲームです。Game 1の相手は、アルゼンチンの女子のトップの一人、カロリーナ・ルハン選手で、クイーンが敵陣で取られそうになりながら盤を一周しながらポーンを一つかすめ取ったのが効いて、勝ちになりました。ちなみにラテンアメリカには女子でも強い選手が何人もいて、同じアルゼンチンのクラウディア・アムーラ（Claudia Amura）選手、メキシコのヤディラ・エ

ルナンデス (Yadira Hernández) 選手 (実はヤディラ選手のお兄さんでメキシコトップのグランドマスターのヒルベルト・エルナンデス (Gilberto Hernández) 選手は、アムーラ選手の旦那さんで、お二人は今も現役を続けつつ、アルゼンチンを拠点にチェスの普及に尽力しています。)、そしてエクアドルのマルタ・フィエロ (Martha Fierro) 選手といった私とそれほど年の変わらない選手たちと試合ができたのは、いい思い出です。

Game 3 の Everardo Matsuura 選手はお名前からわかるように日系の方で、お父様も弁護士として働かたわら、チェスを指したり新聞にコラムを書いたり大会を運営されたりと、地域のチェスの普及に貢献された方だそうです。試合自体は彼にとって不出来なものだと思いますし、また最後の局面で指し続けられていたら、こちらが優勢とは言え、まだまだ先は長い試合だったかと思うのですが、相手の攻めをしっかり受け切れたのは良かったかなと思います。(私が強い人に勝つのは、どうもこうした、相手の無理攻めをとがめて、駒得あるいは反撃に持ち込む、というのが多い気がします。) なお、マツウラ選手はこの大会の数年後、グランドマスターになりました。最後の Game 4 は、ボリビア唯一のグランドマスター、サンブラーナ (Oswaldo Zambrana) 選手とのゲームです。私はこのポイズン・ドポーン (毒入りポーン) という戦法を以前かなり勉強したのですが、相手も警戒しているのでなかなか実戦で現れません。この試合ではグランドマスター相手にその戦法を使って、しかも引き分けに持ち込むことができたのがいい思い出になりました。

Game 1: Carolina Luján - Akira Watanabe, São Paulo 2008.

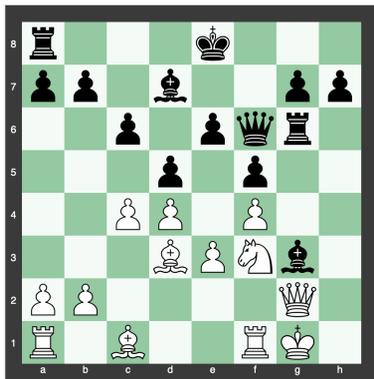
1. e4 c5 2. Nf3 d6 3. d3 Nc6 4. g3 g6 5. Bg2 Bg7 6. O-O e6 7. Re1 Nge7 8. c3 O-O 9. a3 b5 10. d4 cxd4 11. cxd4 d5 12. e5 Qb6 13. Nc3 h6 14. g4 Bd7 15. Be3 Na5 16. Na2 Nc4 17. Bc1 Rac8 18. b3 Na5 19. Nb4 Nac6 20. Nd3 Nxd4 21. Nxd4 Qxd4 22. Be3 Qc3 23. Bc5 Rfe8 24. b4



24... Nc6 25. Re3 a5 26. Ra2 axb4 27. axb4 Ra8 28. Nc1 Qc4 29. Bf1 Qf4 30. Nd3 Qg5 31. f4 Qd8 32. Ree2 Qh4 33. Rg2 Rec8 34. Nc1 Nd8 35. Nb3 Nb7 36. Qa1 Qd8 37. Ra7 Nxc5 38. Nxc5 Bc6 39. Rga2 Rxa7 40. Rxa7 d4 41. Qa2 Qh4 42. Be2 Qh3 43. Bd1 Bf8 44. Ra3 Qh4 45. Rg3 Bxc5 46. bxc5 Qe7 47. f5 Bd5 48. Qd2 Qxc5 49. fxg6 d3+ 50. Qf2 Qxf2+ 51. Kxf2 Bc4 52. gxf7+ Kxf7 53. g5 hxg5 54. Bh5+ Kg7 55. Rxc5+ Kh6 56. h4 b4 57. Bd1 b3 58. Rh5+ Kg7 59. Rg5+ Kf7 60. Rh5 Rb8 61. Bxb3 Rxb3 62. Rh7+ Kg6 63. Rd7 Rb2+ 64. Ke3 Bb5 65. Rd6 Kf5 66. h5 Kxe5 67. Rd8 Rh2 68. Rb8 Bc4 69. Ra8 Rh3+ 70. Kd2 Kd4 0-1

Game 2: Akira Watanabe - Everaldo Matsuura, São Paulo 2008.

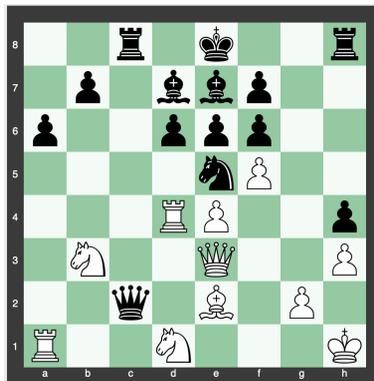
1. d4 d5 2. c4 c6 3. Nf3 Nf6 4. e3 e6 5. Bd3 Ne4 6. Qc2 f5 7. Ne5 Nd7 8. Nxd7 Bxd7 9. O-O Bd6 10. f3 Qh4 11. g3 Nxc3 12. hxc3 Bxc3 13. Qg2 Rf8 14. f4 Rf6 15. Nd2 Rg6 16. Nf3 Qf6



17. Ne5! Bh2+ 18. Kxh2 Rxc2+ 19. Kxg2 O-O-O 20. Rh1 h6 21. Bd2 g5 22. Kf2 Be8 23. c5 g4 24. Ba5 h5 25. Bxd8 1-0

Game 3: Oswaldo Zambrana - Akira Watanabe, São Paulo 2008.

1. e4 c5 2. Nf3 d6 3. d4 cxd4 4. Nxd4 Nf6 5. Nc3 a6 6. Bg5 e6 7. f4 Qb6 8. Qd2 Qxb2 9. Nb3 Qa3 10. Bxf6 gxf6 11. Be2 h5 12. O-O Nd7 13. Kh1 h4 14. h3 Be7 15. Rad1 Qb4 16. f5 Ne5 17. Qe3 Bd7 18. a3 Qxa3 19. Rd4 Rc8 20. Ra1 Qb2 21. Nd1 Qxc2



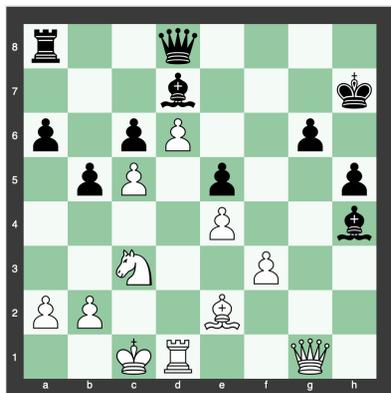
22. Rc1 Qa2 23. Ra1 Qc2 24. Rc1 Qa2 1/2-1/2

Japan League 2009

この大会には当時売り出し中だった（今では堂々の世界トップの一人にして、世界最高の「チェス・ストリーマー」でもあります）米国のヒカル・ナカムラ選手が出場するというので、自分も参加しました。ナカムラ選手と試合をするのが目標（スイス式という組み合わせ方式で、ある程度の好成績を収めていれば、対戦するチャンスがある）で、第1ラウンドにいきなり負けてしまい、早くもその目標は危ぶまれましたが、第5ラウンドに小島慎也さん、第6ラウンドに南條遼介さんと、今はインターナショナルマスターになっている若いお二人にラッキーにも勝つことができ（いずれの試合も相手が優勢の局面があったのですが）、最終局、ナカムラ選手と試合をすることができました。戦型が得意のシシリアンディフェンスだったこともあって善戦し、引き分けを提案されましたが（ここまで彼は全勝だったので、引き分けでも優勝が確定した、という事情もあり、またもしかすると、あまり体調が良くなかった、ということもあったのかもしれません）、その次に（5分考えて）決め手と思って指した手にうまい受けの手段があり、まだいい勝負でしたがそこから崩れて負けてしまいました。負けて当然の相手とは言え、悔しい負け方ではありましたが、強い相手に善戦した、という意味では、このゲームが私の生涯ベストのゲームなのかな、と思います。

Game 4: Shinya Kojima - Akira Watanabe, Tokyo (Japan League), R.5, 2009.

1. d4 Nf6 2. c4 g6 3. Nc3 Bg7 4. e4 d6 5. Nf3 O-O 6. h3 e5 7. d5 Na6 8. Bg5 Qe8 9. Be2 Nh5 10. g3 Bd7 11. Nh2 h6 12. Be3 Nf6
13. Qd2 Kh7 14. g4 Nc5 15. f3 Ng8 16. O-O-O a6 17. h4 b5 18. Bxc5 dxc5 19. d6 c6 20. Qe3 Qd8 21. g5 f6 22. Ng4 h5 23. gxf6
Nxf6 24. Nxf6+ Rxf6 25. Qxc5 Rf4 26. Qf2 Bf6 27. c5 Rxh4 28. Rxh4 Bxh4 29. Qg1



29... Qg5+ 30. Qxg5 Bxg5+ 31. Kc2 Be3 32. b4 a5 33. a3 axb4 34. axb4 Bd4 35. Rb1 Ra3 36. Rb3 Rxb3 37. Kxb3 Kh6 38. Bxb5
cxb5 39. Nd5 Kg7 40. Nb6 Be6+ 41. Kc2 Kf7 42. Kd3 h4 43. Ke2 h3 44. Kf1 Bc4+ 0-1

Game 5: Akira Watanabe - Ryosuke Nanjo, Tokyo (Japan League), R.6, 2009.

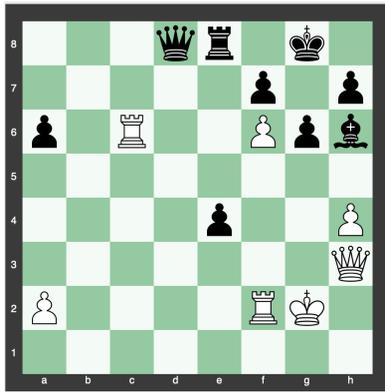
1. d4 d6 2. e4 g6 3. Nc3 Nf6 4. g3 Bg7 5. Bg2 O-O 6. Nge2 e5 7. h3 c6 8. O-O b5 9. a3 a6 10. Be3 exd4 11. Nxd4 Bb7 12. Nb3 Re8
13. Bf4 Bf8 14. Qd2 Nh5 15. Bg5 Qc7 16. g4 Ng7 17. Be3 Nd7 18. f4 a5 19. Qf2 b4 20. axb4 axb4 21. Ne2 c5 22. Ng3 Rxa1 23.
Rxa1 Ne6 24. f5 Nd8 25. Na5 Ba8 26. Nc4 Nc6



27. e5! dxe5 28. fxg6 hxg6 29. Bd5 1-0

Game 6: Hikaru Nakamura - Akira Watanabe, Tokyo (Japan League), R.7, 2009.

1. e4 c5 2. Nc3 e6 3. Nge2 Nc6 4. d4 cxd4 5. Nxd4 d6 6. g4 a6 7. g5 Nge7 8. Be3 b5 9. Bg2 Bb7 10. f4 Nxd4 11. Qxd4 Nc6 12.
Qd2 Be7 13. h4 Na5 14. b3 Qc7 15. Ne2 O-O 16. O-O Rfe8 17. Ng3 Rac8 18. Nh5 Bf8 19. Rf2 d5 20. f5 dxe4 21. fxe6 Rxe6 22.
Bh3 Rd6 23. Qe2 Re8 24. Raf1 Bd5 25. Rg2 Nc6 26. Nf6+ Rxf6 27. gxf6 g6 28. c4 bxc4 29. bxc4 Be6 30. Bxe6 Rxe6 31. Kh1 Ne5
32. Bf4 Qc6 33. Bxe5 Rxe5 34. Qe3 Qxc4 35. Rb1 Qe6 36. Rb6 Qf5 37. Rf2 Qg4 38. Rf4 Qc8 39. Kg2 Bh6 40. Qh3 Qd8 41. Rc6 Re8
42. Rf2 draw offer



42... Qd5?! (42... e3!) 43. Rfc2! Bf8 44. Qe3 a5 45. Rc8 Rxc8 46. Rxc8 Qxa2+ 47. Kg3 Qd5 48. Qa3 Qd3+ 49. Qxd3 exd3 50. Kf3 a4 51. Ke3 a3 52. Kxd3 a2 53. Ra8 h5 54. Rxa2 Bd6 55. Ke4 Bb4 56. Rc2 Bd6 57. Rb2 Bc5 58. Kd5 Ba3 59. Rb3 Bc1 60. Rb8+ Kh7 61. Rf8 g5 62. Rxf7+ Kg6 63. Ke6 1-0

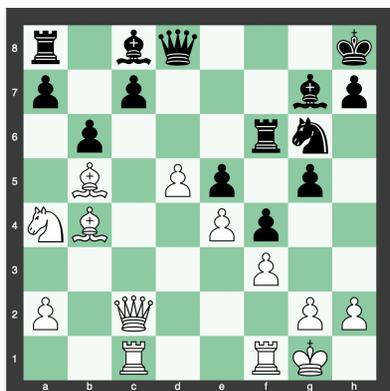
Istanbul, Turkey, 2012

2000年のイスタンブールのオリンピック（国別対抗戦）のあと、私は日本国内の大会に出るのをやめてしまい、それ以来日本代表になることもありませんでしたが、2008年に日本のチェスに復帰し、その後も大会に出続けた（そしてそれなりの成績を残した）ことで、それから12年後、再び同じイスタンブールでオリンピックに出ることができました。以前は町の中のホテルに泊まって、そこから歩いて行ける距離にあった試合会場まで通ったのが、空港近くの（つまり町からかなり離れた）ホテルと会場の往復となるなど、大分様変わりはしましたし、そして何より私以外の選手はほぼ完全に入れ替わっていましたが、再びオリンピックに出られたことは本当にいい経験になりました。成績は正直良くはありませんでしたが、それでもコーチのミーシャ・ストヤノビッチさんのおかげで、そのときの自分の実力以上のものを出してもらえたように思います。また、1990年の世界ジュニア選手権の時によく一緒に過ごしていた、ジャマイカ代表のピッターソン選手とトルコのギョクハン選手と22年ぶりに3人で再会したのも、本当に素晴らしいというか、チェスを続けていればこそ、のできごとでした。

ご紹介するゲームは4局。最初はフィンランドの若いマスターに勝ったゲームで、残りは3局とも引き分けとなった試合です。フィンランドの Sipila 選手とのゲームでは、不利を覚悟して駒損を容認する手を指したところ、相手がそれを取らず、しかも数手後に相手に見落としがあって、私の方が良くなりました。そのあとの攻め合いも難しいところがあったのですが、なんとか勝つことができました。ポルトガルのベレイラ選手とのゲーム（Game 8）は早い段階での私の捨て駒からなかなか面白い試合となり、最終的にはアンバランスな駒割ながら、バランスが取れた局面となって、引き分けとなりました。2番目のアルジェリアとのゲーム（Game 9）は不思議な試合でしたが、途中良くなったと思いきや、相手に良い受けがあって、勝ちきれませんでした。内容もさることながら、お相手の方も研究者（確か物理学の先生とおっしゃっていたような）というのと、この前の年に「アラブの春」と呼ばれる民主化運動があったわけですが、そんな中でもチェスのチームを派遣するというのは大変なことなんだろうな、と想ったりした、というので、よく覚えているゲームです。最後のゲーム（Game 10）は当時まだ中学生だったマレーシアの選手とのゲームで、白番なのに簡単に悪くしてしまいましたが、そこからなんとかがんばって引き分けに持ち込んだ、というので、なぜか勝った試合以上に思い出に残っているゲームです。その後彼はどんどん強くなって、ワールドカップという大会で元世界チャンピオンのアナンド選手とマッチを戦ったりして、本当にすごいな、と思います。

Game 7: Vilka Sipila - Akira Watanabe, Istanbul Chess Olympiad, R.3, 2012.

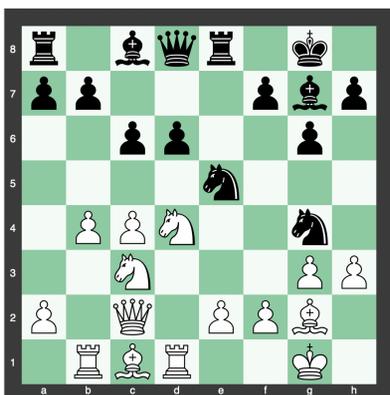
1. Nf3 Nf6 2. c4 g6 3. Nc3 Bg7 4. e4 d6 5. d4 O-O 6. Be2 e5 7. O-O Nc6 8. d5 Ne7 9. Ne1 Nd7 10. Nd3 f5 11. f3 Kh8 12. Bd2 f4
13. Rc1 g5 14. c5 Nxc5 15. Nxc5 dxc5 16. Na4 b6 17. b4 cxb4 18. Bxb4 Ng6 19. Bb5 Rf6 20. Qc2?



20... c5! 21. Be1 g4 22. fxg4 Bxg4 23. Be2 Qd7 24. Nc3 Rg8 25. Qd1 h5 26. h3 Bxh3 27. Bxh5 Bh6 28. Rc2 f3 29. Rxf3 Nf4 30. Rg3
Rxc3 31. Bxc3 Bxc2 32. Bxf4 Qh3 33. Rxc2 Bxf4 34. Re2 Be3+ 35. Rxe3 Qxe3+ 36. Kh1 Qh3+ 37. Kg1 Qg3+ 38. Kh1 Rf2 39. Qg4
Rf1# 0-1

Game 8: Ruben Pereira - Akira Watanabe, Istanbul Chess Olympiad, R.5, 2012.

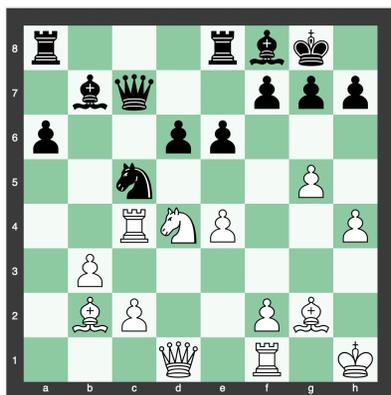
1. Nf3 Nf6 2. c4 g6 3. g3 Bg7 4. Bg2 O-O 5. O-O d6 6. d4 Nbd7 7. Qc2 e5 8. Rd1 exd4 9. Nxd4 Re8 10. Nc3 c6 11. b4 Ng4 12. Rb1
Nde5 13. h3



13... Nxf2!? 14. Kxf2 Nxc4 15. Ne4 d5 16. Ng5 Bxd4+ 17. Rxd4 Qf6+ 18. Rf4 Qxg5 19. Rxc4 Qf5+ 20. Qxf5 Bxf5 21. e4 Bxe4 22.
Rxe4 dxe4 23. Bg5 f6 24. Be3 Rad8 25. Bf1 Kg7 26. a4 a6 27. b5 axb5 28. axb5 cxb5 29. Rxb5 Re7 30. Bc4 Rc8 31. Bb3 Rc3 32.
Rb6 Rd7 33. Ba4 Rdd3 34. Rxb7+ Kg8 35. Bh6 g5 36. Rg7+ Kh8 37. Re7 Rf3+ 1/2-1/2

Game 9: Lies Dekar - Akira Watanabe, Istanbul Chess Olympiad, R.7, 2012.

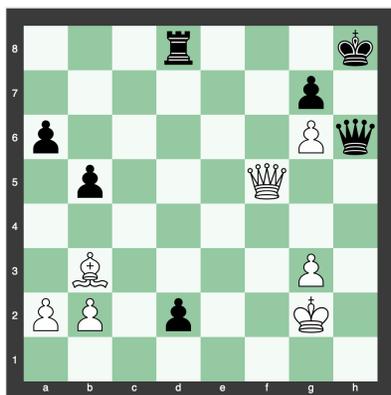
1. e4 c5 2. Nf3 d6 3. d4 cxd4 4. Nxd4 Nf6 5. Nc3 a6 6. h3 e6 7. g4 Nc6 8. Bg2 Qc7 9. O-O Be7 10. Kh1 O-O 11. g5 Nd7 12. h4 Re8
13. Nce2 Bf8 14. b3 Nxd4 15. Nxd4 b5 16. Bb2 Bb7 17. a4 bxa4 18. Rxa4 Nc5 19. Rc4



19... d5!? 20. exd5 exd5 (20... Bxd5 was perhaps better) 21. Rc3 Qf4 22. Bc1 Qe5 23. Rf3 Ne6 24. Be3 Bd6 25. Rg3 Nxd4 26. Bxd4 Qf4 27. Qg4 Qxg4 28. Rxg4 Bc8 29. Rg3 Bxg3 30. fxg3 Bb7 31. b4 Re2 32. c3 Rae8 33. Bf3 Rc2 34. h5 Bc6 35. Ra1 Bb7 36. Rf1 Re7 37. Kg1 Bc6 38. Ra1 h6 39. gxh6 gxh6 40. Kh1 Bb7 41. Rg1 f5 42. g4 f4 43. g5 hxg5 44. Rxg5+ Kh7 45. Rg1 Rc7 46. Re1 R2xc3 47. Re8 Rc1+ 48. Kh2 Kh6 49. Re6+ Kh7 50. Re8 Kh6 51. Re6+ Kh7 1/2-1/2

Game 10: Akira Watanabe – Yeoh Li Tian, Istanbul Chess Olympiad, R.10, 2012.

1. d4 d5 2. c4 c6 3. Nf3 Nf6 4. cxd5 cxd5 5. Nc3 Nc6 6. Bf4 a6 7. Rc1 Bf5 8. e3 Rc8 9. Be2 e6 10. O-O Bd6 11. Bxd6 Qxd6 12. Nh4 Be4 13. f3 Bg6 14. Na4 O-O 15. Nxg6 hxg6 16. Nc5 Rc7 17. Qd2 e5 18. Rc3 Re8 19. Nb3 exd4 20. Nxd4 Nxd4 21. Qxd4 Rxc3 22. Qxc3 d4 23. Qd2 Rxe3 24. Rd1 Re8 25. Bc4 Rd8 26. Qd3 b5 27. Bb3 Nh7 28. Re1 Nf8 29. Re4 Qf6 30. g3 g5 31. h4 Ng6 32. hxg5 Qxg5 33. Rg4 Qc1+ 34. Kg2 Ne5 35. Qf5 Qd2+ 36. Kh3 Nxg4 37. Bxf7+ Kh8 38. fxg4 Qh6+ 39. Kg2 d3 40. g5 Qh7 41. g6 Qh6 42. Bb3 d2?



43. Bd1! a5 44. a4 bxa4 45. Qxa5 Rg8 46. Qf5 Re8 47. Qg4 Rd8 48. Bxa4 Rf8 49. b4 1/2-1/2

Tromso, Norway, 2014

あれからもう 10 年近くたってしまったのか、という感じですが、私が出た今まで最後の（そしておそらく本当に最後の）オリンピックがこのノルウェーのトロムセ（トロムソ）での大会でした。素晴らしいチームメイトそしてコーチにも恵まれ、望外としかいいようのない好成績を残すことができました。勝ったゲーム 2 試合（Game 12 と Game 13）もさることながら、初戦の相手のアルメニアのアコピアン選手は、1991 年の世界ジュニアチャンピオンでもあり、またその後も世界選手権で準優勝までした自分の世代のトップクラスの一人で、そんな選手と試合ができて、しかも途中までかなりいい試合ができたことは、この大会で好成績を残せたきっかけとなったのではないかと思います。

Game 12 と Game 13 はいずれも自分より強い相手に勝ったゲームですが、私が格上の選手に勝つときのパターンとして、相手が「この相手には黒でも勝たないと」と、多少無理をして攻めてくるときに、うまくそれをいなして勝つ、というのが多い気がします。

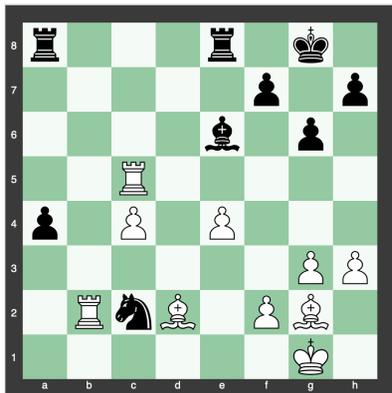
それにしてもやはり悔しいのは最後のモンテネグロのグランドマスターとのゲーム (Game 14) です。勝っていればチームも勝利で、自分自身もインターナショナルマスターのノーム (資格) を一つ達成できた、ということで、惜しい試合でした。気になる方は AI で探せばすぐ見つけてくれるのですが、27 手目に勝つ手があったのに、全く気づかずに、そしてまた「何かもっといい手はないか」と探すこともせず、相手の言いなりになる手を指してしまい、守備体制を固められてしまったのが悔やまれます。いったん不利になったあと、終盤戦でもかなりがんばって、そしてまた相手にミスが出て、引き分けのチャンスがあったのに、短気な手を指してしまって負けてしまいました。(そうそう、実を言うと私がこの終盤戦で苦しんでいる最中に、私たちから数十メートルしか離れていないところで、心臓発作で亡くなった選手がいました。)

終了後、滅多に厳しいことを言わないミーシャ先生に、「チェスっていうのは、とにかく勝負がつくまで、盤にずっと座ってかじりついてがんばる、というゲームなんだよね」と言われて、「本当にその通りでございます、申し訳ありません」と思ったのを覚えています。私自身はそのアドバイスを生かせるチャンスはないかもしれませんが、これを読んで下さった方が、そんな基本姿勢をいかしてくれたらと思い、書きとめておく次第です。

(実は、原稿を修正する段階で AI [Stockfish] でその「悪手」をチェックしてみたら、その手は実は好手で、決定的な悪手はその数手後のキングの動きだった、ということがわかりました。いずれにせよ、悪い局面で「辛抱しきれなかった」というのはその通りなのですが...) なお、これ以外のゲームでは、グアテマラの歴史学を研究する大学院生 (Sergio Garcia Fuentes 選手) とは、試合終了後もいろいろと話をしたことや、広い食堂 (ノルウェーだけあって、スモークサーモンが食べ放題でした) で、Game 2 のカロリーナ選手をはじめとする他の国の選手たちとおしゃべりしたこと (前述のアルゼンチンのアムーラ選手に、「(メキシコ代表のだんなさんは元気?)」と聞いたら「大会中は他人よ!」と返されたのを覚えています)、そして大会恒例の「バミューダ・パーティー」(本当にバミューダ国のチームがスポンサーにつく) で、今では世界的なスターとなった、チェス写真家の David Llada さんたちと話をしたのを覚えています。チームメイトをはじめとするいろいろなご縁にめぐまれた、素晴らしい大会でした。

Game 11: Vladimir Akopian – Akira Watanabe, Tromso Chess Olympiad, R.1, 2014.

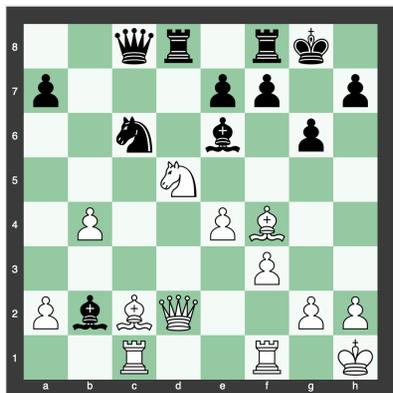
1. Nf3 Nf6 2. g3 g6 3. Bg2 Bg7 4. O-O O-O 5. c4 d6 6. Nc3 e5 7. d4 exd4 8. Nxd4 Nbd7 9. e4 c6 10. Be3 Re8 11. h3 Nc5 12. Qc2 a5 13. Nb3 Nfd7 14. Nxc5 Nxc5 15. Rad1 Qe7 16. Qd2 Be6 17. Qxd6 Qxd6 18. Rxd6 Bxc3 19. Bxc3 Na4 20. Rb1 Nxc3 21. Rxb7 Nxa2 22. Rxc6 Nb4 23. Rc5 Nc2 24. Bd2 a4 25. Rb2



25... Na3? (25... Nd4!) 26. Bf1 Rec8 27. Rxc8+ Rxc8 28. c5 Rxc5 29. Bb4 Nc4 30. Ra2 Ne5 31. Rxa4 Rc1 32. Ra8+ Kg7 33. Kg2 h6 34. Bf8+ Kh7 35. Be7 Kg7 36. Bf8+ Kh7 37. Be7 Kg7 38. Bd6 Nc4 39. Bc5 Bxh3+ 40. Kxh3 Rxf1 41. Bd4+ f6 42. Ra6 Ne5 43. f4 Rh1+ 44. Kg2 Rh2+ 45. Kxh2 Nf3+ 46. Kg2 Nxd4 47. Rd6 1-0

Game 12: Akira Watanabe – Peter Schreiner, Tromso Chess Olympiad, R.3, 2014.

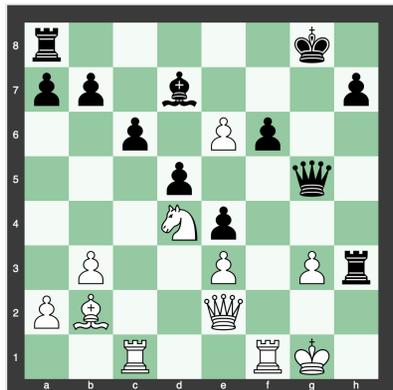
1. d4 Nf6 2. c4 g6 3. Nc3 d5 4. cxd5 Nxd5 5. e4 Nxc3 6. bxc3 Bg7 7. Bc4 c5 8. Ne2 Nc6 9. Be3 O-O 10. O-O Bg4 11. f3 Bd7 12. Rb1 Qc7 13. Bd3 Rad8 14. Bf4 Qc8 15. Rc1 b5 16. Qd2 c4 17. Bc2 b4 18. cxb4 c3 19. Nxc3 Bxd4+ 20. Kh1 Be6 21. Nd5 Bb2



22. Ba4! Bxc1 23. Rxc1 Qa6 24. Bxc6 Kh8 25. Bh6 1-0

Game 13: Akira Watanabe – Hans Tikkanen, Tromso Chess Olympiad, R.8, 2014.

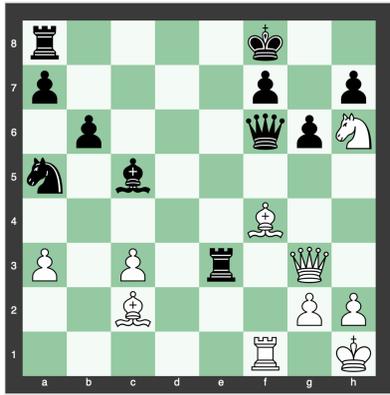
1. d4 e6 2. c4 d5 3. Nf3 c6 4. Nbd2 f5 5. e3 Nf6 6. Bd3 Nbd7 7. b3 Bd6 8. Bb2 O-O 9. O-O Ne4 10. Ne5 Rf6 11. f4 Rh6 12. Ndf3 Nxe5 13. dxe5 Be7 14. Qe2 Bd7 15. Rac1 Qe8 16. Nd4 Qg6 17. cxd5 exd5 18. Bxe4 fxe4 19. f5 Qg5 20. f6?! gxf6? 21. e6! Bd6 22. g3 Bxg3 23. hxg3 Rh3



24. Rf2! Be8 25. Rg2 Bg6 26. Qf2 Re8 27. Qf4 Qh5 28. Kf2 Rh1 29. Rxh1 Qxh1 30. Nf5 Rxe6 31. Nh6+ Kg7 32. Ng4 Qd1 33. Bxf6+ Kf8 34. Bd4+ Bf7 35. Rh2 Qc2+ 36. Kg1 Qd1+ 37. Kg2 Qe2+ 38. Kh3 Qf3 39. Rf2 Qxf4 40. Rxf4 b6 1-0

Game 14: Akira Watanabe – Dragan Kotic, Tromso Chess Olympiad, R.11, 2014.

1. d4 Nf6 2. c4 e6 3. Nc3 Bb4 4. e3 c5 5. Bd3 Nc6 6. Ne2 cxd4 7. exd4 d5 8. cxd5 Nxd5 9. O-O O-O 10. Bc2 Bd6 11. a3 Nxc3 12. bxc3 e5 13. d5 Na5 14. f4 exf4 15. Bxf4 b6 16. Qd3 g6 17. Qg3 Bc5+ 18. Kh1 Ba6 19. Rfe1 Qxd5 20. Nd4 Rfe8 21. Nf5 Be2 22. Qg5 Qd8 23. Nh6+ Kf8 24. Qg3 Qf6 25. Rf1! Bxf1 26. Rxf1 Re3



27. Qf2? (27. Ng4!! Rxc3 28. Nxf6 Rxd3 29. Bh6+ Ke7 30. Nd5+) 27... Re7 28. Qf3 Rd8 29. Ng4 Qc6 30. Bh6+ Kg8 31. Be4 Qe6 32. Bg5 f5 33. Bd5 Rxd5 34. Nf6+ Kg7 35. Nxd5 Rf7 36. Nf4 Qe4 37. Qh3 Kg8 38. Nd3 Qg4 39. Qxg4 fxg4 40. Rxf7 Kxf7 41. Nxc5 bxc5 42. Be3 Nb7 43. Kg1 Ke6 44. Kf2 Kd5 45. Kg3 Ke4 46. Bh6 Kf5 47. Kf2 Nd6 48. Bf8 Ne4+ 49. Ke3 Nxc3 50. Bxc5 a6 51. Kd3 Nd5 52. g3!? h5 53. Kd4 Nf6 54. Kc4?? Ne4 55. Be3 g5 56. Kb4 h4 57. Ka5 h3 58. Bg1 Nc3 59. Kxa6 Ke4 60. Ka5 Nb1 61. a4 Nc3 0-1

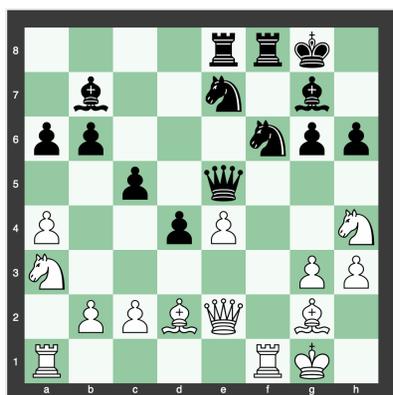
その後

最後にもう2局、その後指したゲームを紹介させて下さい。Game15は2018年の名古屋オープンでのゲームです。この年の夏前に名古屋に出張で行ったとき、名古屋チェスクラブの堀江貴弘さんに「50周年だから暁さんも来ませんか？」とお声をいただき、参加することにしました。その前の年に子供が生まれたこともあり、駒に触るのも久しぶりで途中は全然ダメでしたが、最終戦で南條さんと指すことができ、しかも相手のミス突いて、ではありますが、勝つことができました。はじめて子供を大会に連れて行った、という意味でも思い出深いです。(今度大会と一緒にいくときは、彼 and/or 妹が出るのに私がついていくときでしょう。)

そして最後のGame 16は、コロナの下で開かれたオンライン・オリンピアードでの試合です。長年のブランクに加え、オンラインでのチェスは全くやったことがなかったこともあって(はじめてしまうとハマってしまうのがこわくて、やらないようにしていたため)、この大会はとにかく散々なででした。最初のゲームも勝ちの局面からクイーンを取られたりしてひどかったのですが、モナコのグラントマスターが相手のこの試合だけは、素晴らしい指し回しで勝つことができました。(実は手番を勘違いしていて、黒番での対策ばかりを考えていたのですが、白番で、しかも自分の得意な戦型に持ち込めたのもラッキーでした。)Chess.comというサイトで自分のやったゲームを再生できるのですが、未だに疲れたときなど、(お恥ずかしい話ですが)このゲームを並べて自分を励ましたりしています。

Game 15: Akira Watanabe – Ryosuke Nanjo, Nagoya Open, R.7, 2018

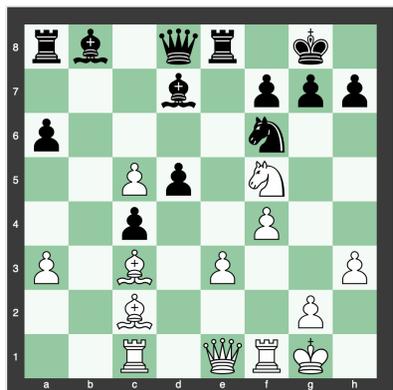
1. Nf3 g6 2. g3 Bg7 3. Bg2 d5 4. O-O e5 5. d3 Ne7 6. Nbd2 O-O 7. e4 h6 8. Re1 d4 9. Nc4 Nd7 10. a4 b6 11. h3 c5 12. Nh2 Bb7 13. f4 Qc7 14. Nf3 Nc6 15. Rf1 a6 16. Na3 Ne7 17. Bd2 f5 18. Nh4 fxe4 19. dxe4 Nf6 20. Qe2 Rae8 21. fxe5 Qxe5?



22. Qc4+! Nfd5 (22... Kh7 23. Bf4 Qh5 24. Bf3!) 23. Bf4 Qe6 24. exd5 Bxd5 25. Bxd5 Nxd5 26. Rae1 Ne3 27. Bxe3 dxe3 28. Rxf8+ Kxf8 29. Qxe6 Rxe6 30. c3 Be5 31. Kg2 Bc7 32. Nc2 e2 33. Nf3 b5 34. axb5 axb5 35. Ng1 b4 36. Rxe2 Rb6 37. cxb4 cxb4 38. Nd4 Kf7 39. b3 Bd8 40. Ngf3 Bf6 41. Rc2 Rb7 42. Rc4 Kg7 43. Rc7+ Rxc7 44. Ne6+ Kf7 45. Nxc7 Be7 46. Ne5+ Kg7 47. Nd5 Bd6 48. Nd3 g5 49. g4 Kg6 50. Kf3 h5 51. Ke4

Game 16: Akira Watanabe – Igor Efimov, Online Chess Olympiad, Div3 A, R.8, 2020

1. d4 Nf6 2. c4 e6 3. Nc3 Bb4 4. e3 O-O 5. Bd3 b6 6. Ne2 Bb7 7. O-O d5 8. cxd5 exd5 9. a3 Bd6 10. Ng3 Re8 11. Bd2 a6 12. Rc1 c5 13. dxc5 bxc5 14. Na4 Nbd7 15. b4 c4 16. Bc2 Ne5 17. Bc3 Nfg4? 18. h3 Nf6 19. Nf5 Bb8 20. Nc5 Bc6 21. f4 Ned7 22. Qe1 Nxc5 23. bxc5 Bd7



24. Nxc7!! Kxc7 25. Qg3+ Kf8 26. Qg5 Re6 27. f5 Rc6 28. Ba4 Qc7 29. Rf4 Ke7 30. Rd1 h6 31. Qh4 Ba7 32. Rxd5 Bxc5 33. Re4+ Kd8 34. Bxf6+ Kc8 35. Bxc6 Qxc6 36. Rxc5 1-0

以上、皆さんにお見せする価値のあるゲームだったかはわかりませんが、チェスの記事なのにゲームが全くないのも寂しいかと思い、棋譜と、そのゲームの背景の一部をご紹介します。チェスをされない方には、文章を通して少しでもチェスに親しみを持って頂けたらありがたいですし、すでにチェスをされる方には、よかったら棋譜を並べてもらって、文章と合わせてその場の空気を想像して頂けたら、と思います。



©David Llada 2014年のトロムソ・オリンピックで対局中の筆者

¹ 実はこれらの要因に加えて、6歳の息子が最近チェスを始めたことも、本稿執筆の重要なきっかけの一つです。（当の息子は、早くも将棋の方が面白い、と言い出しているので、チェスを続けてくれるかは不透明ですが。）

² この名著とは別に、東工大への着任が決まってからの、ILAのホームページの紹介記事（元々は柳瀬博一先生によるインタビュー形式）や、2020年度の外国語セクション広報紙『外国語だより』における山崎太郎先生との対談記事も、本稿のような形式を思いつくきっかけとなったと思われます。両先生、そして『外国語だより』の編集を担当されていて、自ら文字起こしをして下さった、戦暁梅先生（現在日文研にご所属）と田村齊敏先生に厚くお礼を申し上げます。

³ また細かい点ですが、同じくWikipediaに「東京大学を卒業後」とありますが（<https://ja.wikipedia.org/wiki/渡辺暁>，2023年9月8日最終閲覧）、4年を終えて卒業せず、休学してメキシコに行き、帰国後に卒論を書いて卒業しました。そんな時間の使い方は、今では推奨されないかもしれませんが、私自身にとっては本当に人生の転機となったので、本当にありがたい1年間だったな、と思います。

⁴ #37 渡辺暁「移民とチェスとコロナ禍と」×大竹尚登 Tokyo Tech DLab "STAY HOME, STAY GEEK" 研究者インタビュー（https://www.youtube.com/watch?v=OatONrAl_Ws，2023年7月31日最終閲覧）